ミンダナオの風

Hangin gikan sa

MINDANAO

アメラ
兎口で裂けていた口もとが
すっかりきれいになったね
イスラム教徒の難民キャンプ
ビニールシートの仮小屋は
雨も漏るし
ちょっと強い風が吹けば
支柱ごと、飛んでいきそうな代物だった
そんな生活からようやく抜けだして
帰った我が家は
ところどころ腐っていたけど
やっぱり我が家は、
我が家の匂い
良く帰ってきたね、アメラ
緑したたる稲穂がゆれて
アメラの帰郷を迎えてくれる
田んぼのむこうでは、
戦火で焼けた家を建て直し
お隣さんが水牛で
荒れた田んぼを耕し始めた
母さんの後ろから
はずかしげにのぞいたアメラ
きれいになったのは、
口もとだけじゃなかった

チェリーミー　ヌライダ　ファヒマ　フレデン　ジェーン

エープリルボウイ　ジャンパウロ　レナート　アボバカール　サニージェイ

治療を待っている　子どもたち

頭を撃たれたジェーン君は、すでに一ヶ月ダバオの病院に入院し、抗生物質を投与して、現在は皮膚の移植場所を検討中。もうじき結果がでるでしょう。けれども、複雑な家庭の状況もあり、退院後は孤児院に入るべきか否かを、福祉局のソシアルワーカーと相談しなくてはなりません。

さらに難しい手術は、脱腸のチェリーミーさんとジャンパウロ君とフレデン君。フレデン君はお尻の小さな脱腸なので一度の手術ですむかもしれません。けれども、ジャンパウロ君は腹からの排便で今回が三度目の手術です。しかしなかでもとりわけ難しいのは新しく加わったチェリーミーさん。年齢が高いだけに脱腸が大きく、腹からしか排便できずに、ほんとうに可愛そう。治るとしても数度の手術が必要でしょう。

いっけん普通の女の子のように見えるヌライダさんは、口を開けると大きな口蓋破裂があります。もう少し小さいときに手術をすれば良かったのだけれども、貧しくてできなかった。これ以外にもまだ５名の子どもたちが手術待ち。前回の皆さん方からの寄付は３４２０００円でしたので、それにカトリック大阪司教区のシナプス子ども基金を加えて本格手術にそなえます。プロジェクトを開始して４ヶ月、治療の必要な子どもは増える一方。皆さんのよりいっそうの支援をお願いします。寄付は全額をプロジェクトにのみ使っています。

子どもの医療と救済活動を支援して下さる方々へ

郵便振替口座番号　　記号００１００　０　１８０５７

加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』　代表松居友

ジュン　ラヒッド　ライダ　ナサール　スラ

アロナ　アメラ　カテリーヌ　ジュン　アニサ

治療が終わった　子どもたち

特集　医療プロジェクト報告　　松居友

兎口や目の治療など、ひかくてき容易に手術ができる子どもたちの治療が終わりました。イスラム教徒難民のアニサちゃん、アメラちゃん、ラヒッド君、ナサール君。いっしょにダバオで数日間、寝食をともにした日々が忘れられない。彼らもようやく、半年以上続いた難民生活から開放されて、読み聞かせに村を訪ねてみると、アニサちゃんもアメラちゃんもとっても可愛らしい女の子に成長しはじめていました。手術の当日に熱を出したアボバカール君だけが手術待ちです。

先住民族のカテリーヌちゃん、アロナちゃんそしてジュン君は同じ村の出身。アロナちゃんの頭も完治したし、ジュン君の足も治って普通に歩けるようになりました。父さん母さんは大喜び。

カテリーヌちゃんの目の治療も、ほとんど終わっていたのだけれど、ひさしぶりに訪ねるとまだ完治していませんでした。でもお母さんの話によると、村の巫述師に見てもらった結果、家の外に熱湯をまいたときに知らずに妖精の目にかかってしまい、その妖精が怒ってカテリーヌの目にいたずらをしたので、悪霊払いをしてもらったあと薬草を塗ったので、これで治るだろうと言うことでした。

病院に行けない貧しい人たちは、たいがいマナナンバルとよばれる巫述師に治療を頼むのですが、巫述師の薬草の知識はハンパではないし、妖精のことも大事なので、そのまま経過を見ることにしました。治れば良いのだから。しかし、ライダさんの場合はちょっと違って、足の深い傷が膿んでいるのだけれども、青い沼の祟りゆえに病院へ行ってはならぬと巫述師に言われたそうで、そっと村を抜けだして病院に連れて行きました。傷は完治しました。

しかし、これからが治療の本番です。治療待ちの子どもたちの方は、場合によっては数ヶ月もダバオ市の病院に入院して、複雑な手術を受けなくてはならない子どもたちです。

貧しい人がなぜ治療を受けるのが困難なのか

松居友

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
お金が無くて学校に行けないときと
病気になっても病院に行けないとき・・・

フィリピンには、貧しい人々のために無料で治療を施す大きな病院がある。また医療ミッションを主としたＮＧＯも活躍しているので、貧しい人々でも治療が受けられる仕組みになっているはずなのだが、それにもかかわらず「貧しい人々がなぜ治療を受けるのが困難なのか」長いあいだの不思議だった。

たとえば、ダバオには日本政府の援助で出来た、貧しい人々のための大きくて立派な病院があって、診察代と場合によっては治療代がただになる。私たちもよく利用しますが、中流以上の人ならば、カトリック系の私立病院に行くはずです。値段は十倍でも治療に待ち時間がなくサービスがぜんぜん違いますから。

それでは、医療から少し遠い地方都市はどうかというと、子ども図書館のあるキダパワン市の場合びっくりしました。比較的大きな病院から一見して家族経営の病院まで、まるで病院の見本市のようにいくつもあるのです。走れば3分で抜けられる小さな町なのに。

どう見てもあまり患者がいない気配の病院もあるし、こんなにたくさんの病院があって成り立つのかなあ、と心配したのですが、これで成り立つと言うことは、フィリピンの金持ちは大の病院好きで病院のハシゴをするか、よほど儲かるからでしょう。すべて私立病院で十数パーセントの中流以上の人々しかかかれません。

貧しい人々は治療を受けられないのは、病院が少ないからではなくて、たくさんの病院があるのに、貧しい人々のための病院が限られているからです。

ムスリム難民キャンプ

フィリピンでは公立病院は貧しい人々の病院という事になっていて、キダパワンにも公立病院はありました。町から離れた森の中（？）にあったのです。

それなりの病院でしたが薄暗い蛍光灯のしたで病室は満杯。患者は通路にまであふれています。縁台のような粗末なベッドが、テカテカに磨き込まれたコンクリートの通路の左右に並べられ、その上に草で編んだマットを敷いて、持参の薄い敷布をかけて寝ています。その横には付き添いの家族たちが、付きっきりで看病していました。看護婦はいますが、医者がいる気配はありません。

後でわかったことですが、診察は週に一回か二回、私立病院

から先生が出張でやってくるだけ、診療機械はあってもドクトルがいないのです。私立病院ではその日のうちにすむ診察が、廊下で何日もまたされたあげく医師が素通りしようとするしまつです。

しかし、私立病院にかかることの出来ない貧しい人々は、そうしたことすべてにじっと耐えて、付き添いの家族たちとともに、気まぐれに来るかのようなドクターをじっと待っているのでした。

貧しいといっても、それなりに段階があって、本人は貧しくても親戚が結構豊かで、親戚に頼って暮らせる人々もあったりといろいろなのですが、とにかく貧しいと言えば自給自足に近い生活をしている山岳民族と難民でしょう。現金収入と呼ばれるものがほとんどなく、病院にかかること自体考えられません。町に出るためのジプニー代もないのです。

山岳民族に限らず、病院にかかれるのはほんの一握りの人々で、貧しい人々の目から見るなら、病院へ行って治療を受けること自体がかなりのステイタスで、明治の頃の田舎の人が東京に出て帝国ホテルに泊まるような感覚なのです。

つまり、本当に貧しい人々の場合は、病院や医院で治療を受けるということすら大変なことで、たいていはじっと痛みに耐えながら、治療と言っても、ヒロットとかマナナンバルと呼ばれるマッサージ師や訃術師にかかるのがせいぜいと言ったところでしょう。

乳房の半分ほどが乳ガンで侵された女性にも会いました。マナナンバルから渡された葉を胸に張って痛みをしのいでいたのですが、出会ったときにはもう手遅れでした。もっと初期の段階で、病院にかかれば何とかなったのかもしれませんが、貧乏な人々にとっては、それをしようにも出来ずに、じっと死を待つしかないのです。

ムスリム難民キャンプ

薬代の怪

診察や治療費がただという話は、こちらに来ると良く聞きます。先ほど言及した日本政府からの援助やＮＧＯで運営している病院もそうですが、私立病院でも貧しい人々の枠組みがあって、人数を限って診察や手術を無料にしているのです。

最初にそれを聞いたときは、さすがＮＧＯはすばらしい、これで誰でも治療を受けられると思ったのですが、それが大きな間違いであることに気がつくまで、さほど時間がかかりませんでした。つまり、確かに病院の診察や治療や手術代はただなのですが、薬代がかかるのです。

日本で薬代と言えば、だいたい薬局で買う飲み薬のことを考えますが、こちらではそれを「外の薬」と呼びます。というのことは、「中の薬」というのが別にあるわけで、例えばスタッフのアイリーンがデング熱にかかった時の治療を見てみましょう。ちなみに、デング熱というのは、蚊によって媒介される病気で、ピキットの難民キャンプなどの不衛生な場所で高派生率をしめしとりわけ子どもや乳児の死亡例が多い怖い病気です。この場合の全体の支出は以下の

通りです。

入院費（相部屋で食事付き）
　　４１７３ペソ
診察費および治療費
　　１５５８，５ペソ
薬代　８７２１，１ペソ
合計　１４２９２，６ペソ

日本円で言えば、一週間で三万円ちょっとという計算になります。重要な点は、見ておわかりのように、診察費や治療費に比べて薬代の負担が圧倒的に大きいことです。この薬代の多くは「中の薬」で、飲み薬以外に、注射の薬、点滴など治療に必要とする薬品のすべてが含まれています。デング熱は、薬が効かない病気と言われていますから、これが一般の病気でさらに手術が加われば、術中に使用されるすべての薬代が加算されます。

つまり政府援助や海外のＮＧＯの援助で無料になる部分は、二番目の診察費および治療費のみで、そのほとんどは、病院における医者や看護婦の人件費や設備の運営費であると思われます。つまり、援助のほとんどは、医者や看護婦を中心とした病院関係者の懐と施設の維持費に消えていくのです。

それでも、貧しい人々にとって、診察費や治療費がただになるだけでも幸いです。しかし、ただで診察を受けても、薬代を払うことのできない大多数の貧しい人々の場合はどうなるのでしょうか。

日本政府の援助で出来た病院前に行ってみればわかります。そこには、病気で動けない人や時には傷ついて血が流れる子どもを抱いた母親が、病院の出した薬の処方を手に道行く人々に物乞いをしている姿を見ることが出来ます。薬を買えないので、処方箋をもらっても、治療も手術も出来ないのです。

こうした真に貧しい人々が八十パーセント近くを占めると言われているミンダナオ。結局彼らは、病院へ行っても治療を断念するか、病院の前で物乞いをするしかないのです。

わたしたちは、小さな事しか出来ませんが、出来るだけ治療費の支援のある病院やＮＧＯを選び、治療が可能な場合は町へ行く車を出して送り迎えをし、子どもと親の滞在費から食費、治療費から薬代までいっさいの経費を持ちます。

さらに、出生届や年齢のわからない子も多く、時には字の書けない親のために役所の書類手続きのすべてを代行したり援助して、その後にやっと治療が出来るようになるのです。

この場合、出費も多くなりますが、それ以上にスタッフの忍耐と努力が要求されます。繰り返し足を運び、役所や病院で待たされたあげく翌日来るように言われたり・・・

人によっては、そこまで支援するのは甘やかしているに過ぎないと言うのですが、私はそうは思いません。実際に山岳民族やモスリム難民の子供たちの状況を見ていると、そこまでしなければ本当に救済することが出来ないのです。

新しい奨学生

アスレーさんとノライダさん

私たちの新しい奨学生、アスレーさんとノライダさんを紹介します。イスラム教徒難民の多く出ているピキットで出会った二人。従兄弟に当たる、アボバカール君とアニサちゃんの兎口を治した縁で、私たちの活動に興味を持ってくれました。今は、『ミンダナオ子ども図書館』にとって、イスラム教徒地区での読み聞かせや医療プロジェクトになくてはならない人材です。

左のノライダさんは二十歳、高校を卒業後は大学に行くのが夢でした。しかし、貧しくて夢を断念、地域の難民のための健康相談プロジェクトに関わってきました。考え方も行動もしっかりしたお嬢さんです。

右のアスレーさんは高校をこんど卒業する１７歳。７人兄弟ですが、一番下の弟が脳性麻痺で体が不自由な生活です。しかしやさしいお母さん（右端）に守られてとても幸せそうな家族です。

このあたりでは一時５万人も難民が出て、家のまわりをテントが囲んでいましたが、そのお世話をしてきた二人。今でも周囲は難民キャンプになっていて、家を失った家族が帰ることもできずに残っていますが三割だけになりました。そんなわけでやっと家族にも笑顔がもどってきました。

ノライダさんを支援して下さるのは私の大学時代の友人で、カトリック大阪大司教区の松浦悟郎司教さんですが、そう話したところ、きっと良い方でしょうね、もちろんぜんぜん問題ありませんよいつかお目にかかれたらうれしいです、と言うことでした。

大学入学は、来年の春以降ですが、どなたかアスレーさんともう数人のイスラム教徒の支援者になってくださいませんか。

『ミンダナオ子ども図書館』の奨学制度は、貧しい若者の高校・大学教育に比重を置いています。奨学生は、同時にスタッフとしても活躍します。
月５０００円（一年間６万円）で大学教育が受けられ、本人からのお手紙もさしあげます。支援希望者は、直接Ｅメールかファックスでご連絡下さい。

（文責：松居友）

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

SEC REG. NO.CN200315083
River Run Apartment Lanao. Kidapawan City North Cotabato Philippines
Tel ：001-010-63-64-288-5426
“Ú‹{•—±‹Ç ：“Œ‹•“s•™•À‹æ‹‹‰ä•R,Q•|,P,R•|,S•|,Q,O,P •R‘b•‡•q
“ðb •F,O,X,O•|,P,Q,O,P•|,W,Q,X,U

『ミンダナオ子ども図書館』を通して、ミンダナオの貧しい子どもたちを支援して下さる方々へお願い。活動目的の違いによって、二つの振込先がありますのでご注意下さい。郵便振り込みのさいには、必ず住所とお名前をご明記下さい。ミンダナオは非常に郵便事情が悪く、封書は到着しないことが良くあります。質問やお便りはＥメールまたはファックスが確実です。領収書が必要な方は、振り込み用紙にその旨お書き下さい。より詳しい活動状況をお知りになりたい方は、ホームページをご覧下さい。

http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/

mindanao@zap.att.ne.jp （松居友）
Tel/Fax ,O,O,P•|,O,P,O•[,U,R•[,U,S•[,Q,W,W•|,T,S,Q,U•@

奨学生支援を希望の方は、Ｅメールかファックスで松居宛にご連絡下さい。

Primary purpose

子どもの成長と発達を支援して下さる方々へ

1、本をとおしてのコミュニケーション　2、ハウスライブラリーとストーリィーテーリング

『アジア子ども文庫』の郵便口座を通して寄付をお願いいたします。

郵便振替口座番号　００１１０　８　５２３３１
加入者名　『アジア子ども文庫』　代表：景山あき子

Secondary purpose

子どもの医療と救済活動を支援して下さる方々へ

１、医療プロジェクト　2、子どものシェルターと孤児施設

『ミンダナオ子ども図書館』の郵便口座に寄付をお願いいたします。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』　代表：松居友